巡琴

八琴

文學古志會出版

晩翠逸史

心琴

文學同志會出版

晩翠遠史

琴

全

大月乘山編

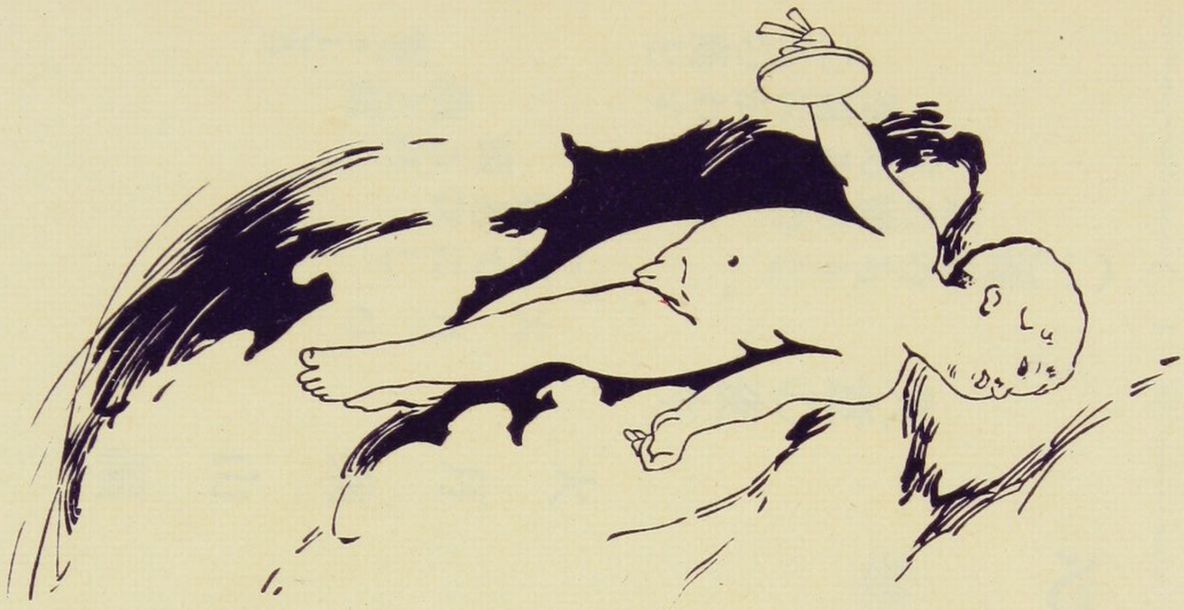
東京　文學同志會出版

心琴

文學同志會出版

心琴目次

失意の夜半……一
嗚呼大塔宮……七
春の野……一一
落花集……一五
ハザクラ……六九



心琴

失意の夜半

大月乘山編

大月ひさ

（一）浮世のちりを
へだてにし
芝の園生の
君と我
すめる心に
滿されて
無言にかわす
顔と面
二人の蔭を
寫すとき

(二)かすめる花の　それならで
誰かは知らん　我思ひ
辛きうき世も　知らずして
はなれかたなき　君と我
清きなさけを　契りつゝ
ぞゞろに木蔭を　たどるとき

(三)昔を知れる　花と月
つれなき人に　捨られし
今ふの姿を　如何に見ん

(四)嵐のねたみ　あるときに
花の姿も　消ゆるらん
雲のそねみの　かゝるとき
月の姿も　欠くるらん
満れば欠くる　世の習ひ
我身の上の　忍ばれて

樂しき昔を　忍びつゝ
血に泣く夜半に　幾そ度
片しき袖を　しぼるとき

（五）一時消え行く　月花は
復び歸る　事あれど
限り知られず　底深く
碎け破れし　心には
苦痛の文字は　刻まれて
拭くとも消えず　はてしなし

（六）同し思ひの　其の折りに
いさ言傳てん　月と花
雲井はるけき　戀人に
暫し生命の　玉の緒を

つなぐはかなき　姿にて
如何に心を　盡くすかを

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

嗚呼大塔宮

小林鶯里

帝業未だ成らず、身は是れ楚囚
直義何者ぞ、猥りに帝敕を矯め
我を捕えて土窟に投ず
枝葉漸く枯れて、根幹終に仆れん
尊氏何者ぞ、猥りに父命を矯め
我を捕へて土窟に投ず
鑿を剪つて陀羅尼を誦せば、點滴座を濕し
鬼氣人に迫る、身は是れ囚虜

憤怨また何者ぞ堪へん
妄執一度胸に燃えては、經文の功德何かあらん
忽ち卷を拋つて、悲憤慷慨
嗚呼また嗚咽歔欷
何者の兇漢か、手に白刃を提げ
身を屏めて、後より窺ふ
刹那電光閃めく
帝子初めて覺り、愕き且つ怒る
汝何者ぞ、咄無禮なる
我は天子の子なり
天子か皇子か、我は知らず

將軍命あり、我は是れ武臣
君請ふ容せ
手を伸べ足を擧ぐれば、帝子已に膝下に在り
力何ぞ能く抗せん、白刃將に加はり
三寸絶えんと欲す
是か非か我は知らず、唯だ維れ命の儘
我跳また忍びず、而も夫れ命なる哉
徒に我を恨みぞ
帝子怒心頭を衝き、顏貌朱よりも赤く
忽ち身を躍らして刀を嚙む
刀尖三寸折れて口に留まる

嗚呼鎌倉山の土窟、長へに鬼啾々。

* * * * * * * * * * * *

春の野

小林鶯里

すみれは紫
蒲公子は黄に
紅きは何
白きは何
雲雀さへずる妙なる調べ
美しき春の野
道ありいと細く
少女子が手にせる鎌

籠を脊に負ひ
頭に卷きし手拭白く
森の木蔭
睦し氣に小牛の遊ぶ
美しき
樂しき
春の野よ
日よ
汝は何故急ぐ
西の雲の黃金色も
山の端に入る汝が姿も

美しきに非ず
されど开は瞬の間
暗き夜の始めなり
日よ、日よ
何ぞ春の野を捨つる
日は默して
オレンジ色に野をあびせ
世の果てに入りぬ
紫はすみれ
黃の蒲公子
紅きは何

白きは何
囀る雲雀
遊ぶ小牛
暗き夜の幕にとざゝれて
美しき春の野も亦終りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

春の野の菫の臺に胡蝶の眠れる如何に情け深きことよ、夏木立の茂み、行く水に草葉投けて讀書に費す時何ぞ夫れ詩趣の淖々たるよ、梧桐の葉片々地上に印し秋のまさに來るを告げ蟲聲唧々として草叢の間に鳴叫す孤雁一聲遠く去つて他郷の遊士、亂腸を斷つ、夫れ如何に吟懷の豐なることよ

此の集我れ朝な夕な春の野の菫を訪ひ、小蟲の悠々たる唸聲に迷ひ夏野の遠近を漫歩に費し或は松風韻々として響き、枯薄垂々たるに金風蕭殺たる邊り、希望の崇大なるに驚き皇天を仰拜し吟懷そゞろに浮動し、或るは深く絶望に叫し斷崖絶壁に佇立し宇宙の搖々たる一大秘密は到底人腦を以て解す可からざるを歎じ、草葉に浮遊せる白露のそれよりも果敢なき人生を憧想し紅涙滾々として地上に永久のインプレッションを與へぬ、……其喜聲の裡、愁嘆の裡、紅涙の袖、靜かに吟し靜かに歌ひたるはこの落花一篇の集、松風颯々たる天韻はあらざらんも菫花胡蝶を慰するの情趣はあらん、我れこの道に志してより春尙ほ淺く崇高なる餘韻

を齎す能はずと雖も我れは悠々緩々詩神の聖途に就かんなり。

靜吟

落花集

のぞみの淵

靜吟著

その一

椰子の木蔭の暗くして
常世のやみの光なし
惡魔の聲の響さては
水の流れも沈むなり
魔の聲響く水あるも

神音傳ふ流れなさや

その二

希望の光明消へはてゝ
苦み、恨み　懊惱へつゝ
絶望の淵に立ずめば
底ひ知られぬ玉眞水
再び聖にかへすてふ
神のみ言はもるゝなり

その三

聖神の傳てに頻笑みつ
プナの枯れ幹に身をよせて

聖きみ神の手にすがり
絶瀨の波をはなるとき
其處に神美の呼聲あり

その四

疲れし腕、舷により
有望の岸に付かんとき
其處に絶へせぬ歡喜あり

その五

をさなき戀に身をやつし
絶望の岸に立つ君よ
嗚呼世の人よ悟らずや

清水巖に響く處
麗琴瑠璃に落る處
汚れし戀、名、拋たば
神のみ愛は汝が胸に
夫れ永却に消へざらん

蘇花

その一

戀にもへ出し星一つ
彼方の嶺に落る時
其處に絶望の影や見ん

その二

戀　星出でず、月出でず
森の木蔭の仄暗く
流るゝ水の音すゝし

その三

若葉の梢はらひつゝ
さ霧に消へし鐘の音は
無限の人生はかなみて
今何處にや迷ふらん

その四

森の裾路に通ひたる

一つ流れぞ神密めし
美妙の聲ぞ響くなり

その五

我朝夕のさすらいに
通ひなれたる草の橋
夕語らふ友なくて
西空紫雲眺むべく
橋に立ちしは幾十度
朝懐語の詩なくして
西詩人を慕ひては
蘇にもへし戀星の

焔に似たる胸の血を
清水になさし幾あした

その六

今尚ほ橋に佇めど
全き友輩得るに難し
今尚水に泣き伏せど
西詩人の影だにも
水面にうつる時あらし

その七

嗚呼野の末の花あざみ
我は今より汝と共に

無味干糟の人生を
花の心と過さんに
神のみとがめありや
なしや

海棠

彩ある星を望み見てか
深夜にうなづく汝海棠よ
嗚呼我がのそみの絶ゆべくあらば
共に泣かんずやさしき花と
人目に角ある現世に立ちて

何をのぞみの花に得んや

雲のゆくへ

來る年春の靜けき夕
一人橋梁の邊に立つくみて
色よき雲の行へをほい
うれしき理想のかけらん時や
夫れ我が希望の成る日見らん
今淋しくも土橋に立ちて
暮れ行く春の空を仰き見
うれしかりける昔日の夢を

忍ぶ我身ぞ暮れ行く春の
嗚呼西空ひくき雲にも似たりや

谷川の春

谷の流れを掬びつゝ
水の源奥行けば
桃花白く又赤く
せゝらぐ水に花散りて
此處にも花咲く春はあり
嗚呼末遠く流れ行く
花の心や如何ならん

春の山家

塵の巷にさまよへる
人こそ知らめ山が家は
香に醉ふ春を啓示する
櫻桃遠近薄白し
無心の鳥に波ゆるく
過る月日ぞ樂しけれ

靈泉

玉垂の

神の宮居の奥深く
せしらぎ出でし眞清水よ
嗚呼汝が姿うるはしや
嗚呼汝が姿潔よき
神のみ靈のひそむてふ
この眞清水に柴舟や
花の小束をそとなげて
笑みて立てりき夕間暮
遲々と湧き出で流れ行く
水の心を掬みもせば
憂になやめる我胸に

其暫し間に玉垂の
神のみ靈や宿るらん

一人旅

山路はいとど淋しきに
日は早や暮れて里遠く
峰の松風音高し

露草のびて路細く
木闇に叫ぶ梟の
こへ細り行く暮の幕

哀れ旅路の破れ衣
露ぞこぼるゝ袖の上に
思ひぞまさる旅の空

草のしとねに石枕
幸うすき旅夢を
露に結びし夜やいくそ

行けど人里遠くして
心あせるも甲斐なしや

月まだ出でず露しげく
虫の音高く星淡し
哀れ此夜も木の蔭に
幸なき夢をむすばんか

露ぞこぼるゝ深草に
疲れ弱りし細足を
やをら横たへ息つきて
我が來し方を見顧れば
山又山や仄暗く
峯又峯や薄れ雲

哀れ何處の空ならん
横雲あはく消ゆる處

幸なき思ひ喞ちつゝ
木の葉蔭れに見上れば
薄青空に光星一つ

老松

入日暮れ行く丘のべに
年經り來にし老の松
今はみどりも淋しげに

生ひ茂るこそ哀れなれ

綠は如何に深くとも
梢は如何に高くとも
操は如何に潔くとも
黃金の花の匂はねば
顧見るなき世なるかや

吹く風さへも世の毒に
晝又夜のかげに吹く
嗚呼汚れたらずや現世は

現や夢に憧かれて
塵の巷や罪の川
黄金の花に目くらみて
迷ひみだるゝ現世の様よ
嗚呼人の世は汚れたり
正義の道はすたれたり

聖高き神ぞましまして
聖き教訓を漏せども
罪の魔風に吹かれては

榮華に狂ひ利に迷ふ
嗚呼一滴の紅涙を
塵門にそゝぐ人なきか

聖き泉囁は暫し間も
罪負ふ塵の世の人を
清めんとすれどなかなかに
富貴に走り名に惑ひ
罪し濁流を掬ぶなる
現世聖道の聲なきや

神風清く吹きすさび
罪に走れる世の人を
はらふとすれどなかなかに
怪樂の夢に醉ひ伏して
聖高き神の訓戒を
嘲り笑ふ仇し根の
哀れ淋しき世ならずや

眞心塵雲に蔽はれては
光明那邊に求め得ん
正義の道のすたれては

僞善の聲ぞ尙高し

雲に聳ゆる老ひ松よ
暫し偲べよ其神の
迷ひの雲を晴す迄

綠り潔かる老ひ松よ
暫し偲べよ其神の
罪の濁流を斷つる迄

操正しき老松よ

暫し偲べよ其神の
怪樂の夢を覺す迄

正義を思ひ僞をいみて
丘の裾路に佇めば
夕日は赤く雲に入る

山水の旅

（一）

搖風輕く野の草に
雲雀の聲や蝶の影

清き菫の香に醉ひつ
重ね重ねし旅の袖

（二）

鳥は峻峯靈嶽に
蝶は薫蕩野の風に
翔へどむつれど我の身は
人の子なるを如何にせん
峯の白雲、雲の峯
哀れ何處を目的として
行かんとするか其雲よ
清きみ空に走りつゝ

（三）

松の梢や竹の葉に
哀れ何をか奏づらん
春雨細く青柳に
そゝぐ風情のひゞきあり
高く咽びて又ひくゝ
消ゆるは何處空の雲

（四）

仰げは高し峯と峯
俯せば囁き聲ひくゝ
咽びつ流るゝ岩清水

山青くして水清く
谷深くして峯けはし

（五）

空ほがらかに風弱き
木の葉がくれや草の根に
淡き仙夢を辿りつゝ
逍遙ふ我も今ははた
怪し希望も絶へ果てぬ
嗚呼逍遙はん山又峰
そゞろ渡らん谷の水

（六）

嗚呼浮雲よ旅の子に
幸ある希望與へてよ

（七）

高く聳ゆる青峰よ
哀れさまよふ旅の子に
崇高き理想を與へずや

（八）

谷間せゝらぐ眞清水よ
哀れ弱りし旅足を
洗ひて歡を與へよや

（九）

嗚呼峰と峰、山と山
嗚呼谷と谷、水と水

潮の夕

（一）

遠寺の鐘陰に響きて
消へて行くべき潮の夕
嗚呼此の夕此の潮に
絶へず囁やく響きありて
戀に懊惱へて泣かん人の子を
汝れは絶へずも慰せんとはせり

汝れが細けく囁やく夕
汝れが語らふ朝の聲に
掬みて盡きざる慰籍はあるを

（二）

仇し希望を遠く夢見つ
闇路行かんとあせれる子等よ
嗚呼、汝れよ汝れ靜かなる夕
來りて掬めよ筆紙すてゝ
其處に湧かんは崇高き理想よ

（三）

罪を深みて戀に懊惱へつ

運命の神に恨怨よせて
絶へ入らんずる人の子等よ
焔燃へ立つ朝に來りて
深き其懷想を語れ
其處に慰籍の聲は響鳥

我が庵

わづらい多き人の世の
仇し願ひを打捨てゝ
逃れ出でたる我なれば
此處に庵ぞ定めなん

山は聳えて水清く
白雲迷ふ峯の風
美妙の調べ音高く
響く梢や松の琴曲

狼吠ゆる聲絶へて
神美の響き聲ひくゝ
囁やく谷間の岩清水
月出る處、澄む處
松琴水聲響く處
四時の眺めの清き處

何れ自然の審美なる
浮世出でたる我なれば
此處に庵ぞ定めなん

朧夜

夜は更けぬらし風冷へて
物音絶へて天地は
たゞ寂莫の幕の内
そゞろ歩きて心なく
やをら彼方を見透ふせば
川に添ひたる草の小路

黑き二つの其影は
路の標示か將た石か
春の朧の月かげに
しかとそれとは分ねども
我れは思ひぬうらわかき
戀の焔にもへ出てゝ
眞聖の神の手によりて
戀の眞を盡すらん
キッスのかげは見へねども
微風に動く四つの袖
嗚呼戀神の聖なるよ

一度戀に身をよせて
稀有絶倫の理想湧き
戀の姿を慕ひては
萬世不朽の功や成る

一度汝れに迷ひては
振天動地の英雄も
尙ほ凡夫に似たらずや

嗚呼聖ひかな戀神よ
嗚呼魔なるかな戀神よ

深山の春

一人旅路の淋しさは
語らふ友もなく鳥に
花の白雲分け入りつ
深山の春をおとなへば
鳴く鳥の音に花散りて
哀れ心ぞいたましむ

廢寺

覓の水の末とへば

哀れ淋しき一つ寺
軒傾むきて瓦落ち
童子の樂書なけれども
朽ちし扉は半ばあき
老ひし櫻の花しげく
人戀しげにほゝ笑めり
庭の飛石苔青く
落花落葉堆し
脊に負ふ山の峯高く
谷の流れのひくゝして
哀れの聲は尙高し

春の日

樂しからずや春の日は
薫風搖々花笑ひ
四顧遠山の頂に
かゝる白雲七重八重
松の梢に吹き渡る
風の響きの輕くして
樂しからずや春の日は
花風輕く袖に充ち

花の清けき香に醉ひて
夢見る胡蝶影美はし
駘蕩三月花の色
蝶は浮かれて香に狂ひ
鳥はむつれて枝になく
池塘の柳枝はれて
春の氣合ぞ長閑なる
麥はのびたり畑中に
草刈る手弱女鄙唄の

聲も長閑けく空はれて
雲雀は高く空に飛び
春の祝の哢りに
調子合せて行く乙女
鎌はゆん手に脊には籠

菜種の花の薫る間に
會ひては離れ離れては
又會ひつゝも蝶二つ
我れは思はず立止り
蝶の行へを眺めけり

蝶はひらひら舞下り
菫の花に眠りしが
やがて又もや舞ひ上り
野邊行く風に翼輕く
罪なきむくろまかせつゝ
霞の中に消へてけり

偲ぶ草

やよ月の君月の君
君は知りてぞおはすらん

我れ初戀の身なる時
美しき乙女と手を取りて
露の下蔭花の袖
焦れ懊惱へし其身には
逢ふて嘻しき草枕
夢の心地ぞ樂しけれ

やよ月の君、月の君
君はきゝてぞおはすらん
櫻花の下に逍遙ひて
頰に散り來る花葩に

互に契る末かけて
變らしものと契ひしが
哀れ無情やはかなしや
妹は甲斐なく消へうせて
懊惱の我を殘しけり
松風清く月白き
江南山の其邊り
良山の櫻花咲く處
過ぎし昔をおとなへば
ありにし人は皈らねど
來る年々に月清く

來る年々に花は咲く
されど失せにし我妹の
花は何處に咲くならん
嗚呼々々遂に我はそもの
懊惱の子とはなりけるよ
あな怨めしよ月の君

落椿

春の小雨ぞ降り出でゝ
行き來の人のと絶へんに
哀れ優しき來る春に

來る春毎に瀨戸に咲く
老ひし椿の花しげく
小鳥淋しく唄ふなり
小雨靜かにそゝぎては
花の結びや解けぬらん
二葩三葩雨負ひて
路の片へに足趾の
しげき泥濘に落ちてけり

嗚呼落椿、落椿
來る年々に咲き出でゝ

春の榮華は荷へども
細き瀬戸路に咲く身には
人に知られん術もがな

今年の春も花散りぬ
而かも人目はこの花に
臨終の幸を與へざりき

嗚呼咲き出でゝ亦散りて
春の光に身は老ひて
花の色香ぞ失せんもの

嗚呼世の人よ情なきよ
せめては老ひしこの花に
臨終の幸を與へよや

愛泉

（一）

殺風西より吹きそめて
三尺茅屋壁あれぬ
天地悄たり巒紅たり
其巒連の紫雲より

秋の女神の出づる時
無限の悲哀こゝに湧く

（二）

三年の不作田は荒れて
むくろは病みて糧なきを
神は何處にましまして
荒田不糧の飢に泣く
破壁襤褸の影や見る

（三）

三年田荒れて糧なきを
憂ふる勿れ我が脊子と

若き妹子は慰めて
病む脊の君の弱り手を
輕く握りて我袖の
眼に蔽へるを覺えけり

（四）

秋風寒く破衣透ふし
一穗孤燈の影吹いて
秋立つ病みのやせし身に
自刄利鎗の感覺あり
嗚呼消へんとす其燈に
無限の紅涙湧くを見る

（五）

汚れし衣に身をもたせ
脊子は苦しき息つきて
冷へし唇頭に云ひけらく
三日願ひて少し得し
紅涙こもるこの藥
早やのみ干して明日よりは
運命を何につなぐべき

（六）

涙にまゆをしめらして
靜かに妹は語るらく

憂ふる勿れ我脊子よ
今日の藥は盡きるとも
か弱き腕の業なれど
三日の藥は得られなん
心落しそ脊の君よ
我が身は粉に碎くとも
など脊の君を死の神の
えにとしなすにえたえんや

（七）

嗚呼我妹よ己が身の
死神の前に打伏すは

小石を碎く價値ありや
されど殘りし妹と子の
末の運命の偲ばれて
望み甲斐なき病の身も
草に伏さんをいなむなり

（八）

契りそ深き妹と脊子
互に語る眞心の
底ひ知られぬ情こそ
うれしからずや愛の神

（九）

田荒れ、糧盡き身は病みて
明日の運命を叫ばんも
妹脊の胸の愛の血は
露に浮べる星のごと
水面にうつる花のごと
流れ盡きざる愛泉の
小波の間に幸神は
溫たかき笑み浮ぶなり

ハザクラ

目次

忍ぶのみだれ
菅公
思はぬ水脈（歌傳）
御衣の雫（秋）
小夜霞（春）
入るさの月
萩の友
摺車
座行

しのぶ草
櫻一木
常盤木

ハザクラ

筑水

しのふべき　花の香あらずも
榮えゆきなむ　葉ざくらの
瑞枝こそまて

忍ぶのみだれ

筑水

破れこそしつれおばしまの。ありし昔べさながらに。
咲きこぼれしぞ花さくら。にほひもさすがゆかしくて。
ひとりながむるつれ〳〵に。君があれなとおもふかな。
荒れこそしつれ庭のもの。ありしあたりはそのまゝに。
木垂れもこきぞしげみ陰。あつさはいつかわすられて。
ひとり涼まんつれなさに。君しまさばと思ふ哉。

うしろの谷の霜ふかみ。
秋の夜寒に耐え難ての。
ひとり目覺す夜な〳〵は。

前の遠山花ならず。
冬の朝衣延えた顏の。
ひとりみすまく朝々は。

君と二人に花がさや。
根こじ歸りておばしまの。
君がうゑにし花さくら。

紅葉木がくれふけゆけば。
鹿のわび音か悲しさに。
あな聞かせまくそを君に。

枯木ながらにさきみてば。
雪のけはひのをかしきに。
あな見せばやなそを君に。

櫻狩りせし春の野ゆ。
階がもと手づからも。
汝れには物のしのばるゝ。

君と二人にうつせみや。
ころもかへして日ねもすの。
君がむつびししげみ陰。

紅葉ふみわけ鳴く鹿の。
露のむぐろふ立ちわびし。
おもへおもへばそのかみの。

み簾の外なる遠山の。
寒さもしらにながめてし。

蟬なく陰のすゝ風に。
あつさを避けてきはやすし。
汝にはものゝ忍ばるゝ。

音をなつかしみ二人して。
こゝらの秋もありにしが。
せこよあたらに忍びつゝ。

雪をめづると二人して。
こゝらの冬もありにしが。

おもへばもへばそのかみの。せこよあたらに忍びつゝ。
うつくし脊子は大君の。まけのまに〳〵かしこみて。
しこのみ楯といでしより。またく歸らずなりにけり。
變動やがてやみければ。ことあげせしをみ軍は。
いくとせ早やもふりにしぞ。高麗の劣弱あはれみて。
げにもろこしの無禮きを。事むけすとておほ君の。
おほしたゝせるみいくさの。員にめされしわがせこよ。
われいでたゝばまさきくて。むなし吾身にかへらめや。

もとよりすてしわぎのちは。さらに惜しともおもはねば。
おもてに傷は負ふとても。背にうけじ仇の彈丸。
かゝらむ時をわぎもこよ。女々しき心あるなゆめ。
よしやちるとも唐土に。大和さくらのたねまかむ。
知らずやちらむ花の身の。こよなき際の譽れとは。
されば汝よよくきゝね。いとし吾が子を母そばの。
母そのかげのいたはりに。大和撫子露をあみ。
ひとり立ちせむそれ迄を。心つくしにいつくしめ。

かへす〳〵もわぎもこよ。
窈窕女ながらますらをの。
あたらがりなぞ花の身の。
何くれ物をさとしつゝ。
のこしてやがて勇しく。
いまなほ現まぼろしに。
あはれ御國のためにして。
せことしれども門出の。
何心ぞもより〳〵に。

われうせぬともしかづかに。
かたみのつまよ夢ばかり。
ちるをほまれと思へれば。
情もこもることの葉を。
門出たまひし面影は。
さやにも見えてましますを。
ほまれの花とちりにたる。
言葉はさらにわすれねど。
胸のうらぶれ往來する。

うらさびにけりわが閨の。
ひとり泣きしてわぶる夜は。
せこの面影あれいでゝ。
こはとばかりに驚きて。
思ふ心もいへばえに。
たゆたひ居れば燈火の。
あはれ夢には相見ても。
玉のやうなる聲にして。

なごやの下に幾夜こめ。
ぬれば忽ち夢のまに。
妻よやせしと音もほそく。
せこにすがりてよりしまゝ。
うれし涙にかきくれて。
消ぬるがごとくまた失せぬ。
あけてむなしき玉手函。
片頬ながらに父と呼ぶ。

ひとつ情のみづ見ゆゑ。
ゆるさせ給へせこのきみ。
妻なる我はまのあたり。
四つの時じくながめには。
君しむかしをわすれても。
夜半のむつごと身にしめて。
そのみ情もこもれるに。
それはあまりにつらかりき。

我も諸音にせを忍ぶ。
あたらがるなといはれても。
このうらぶれをいかにせむ。
それとはなしに惜まれて。
同じふしねの小夜まくら。
我わすれめやとことはに。
あたらがるなといはれしは。
あまりに心つよかりき。

あはれや君がいますてふ。
朝な夕なにかしづきて。
この世ながらに顯身の。
黄泉の國土のいかばかり。
わびごとのみや許多の。
女々しと畏れさもらへど。
われしこぐさの八重葎。
門の戸さしてむなしくも。

黄泉の國なる君がやど。
待つ人ありや側に。
まゝにならぬを世の外なる。
ひとりすまゐのわびしさに。
うさにつれてもつもるらむ。
ゆるさせ給へせこの君。
忍ぶのみだれ〳〵つゝ。
主なき宿を守りわぶ。

思はぬ水脈

たそがれ時の庭しろく。
こぞのふる雪疑ふらむ。
そよとふきくる夕風に。
*一み簾の内なる薫りをも。
花の下かげうたげする。
一入興をそへぬれば。
都大路にいぬ追ひて。
君が誦したる歌のふし。

筑水

枝もろともに花さきて。
けはひをかしき梅の枝。」
えならず通ふ花の香は。
ふきあはせたる心地哉。」
むしろに月の影さして。
*二打誦しいでし人やたれ。」
たはれて暮すうなゐらも。
ほめ傳へぬはなかりけり。」

鄙の小野べに草刈りて。
君が誦したる歌のねを。
生れながらのその才は。
えなれぬ弓の業にすら。
なりかぶら矢のひと響。
的の中央にゐとめてし。
月の桂のえだ折りて。
母のねぎ事あだならで。
*四雲の上なる大きみの。
物したりてふ漢うたは。
いみじき才の働らきに。

すぎはひあかすえせ者も。
きゝつがざるはなかり鳧。」
文の道には言はずもが。
人にもたけて勝りつゝ。」
くはしき譽れ弓場殿の。
痕も朽ちせぬひさ方や。」
*三ふき起こしたる家の風。
のぼるかたかしくらゐ山。」
まけのまに〳〵賢こみて。
世に様々の名こそあれ。」
こよなきものと大君は。

めでうつくしみ何くれの。
世を我物にはびこりて。
うら葉なびけて大内の。
五 *めぐむ柳のなかよりや。
朱雀の殿の密議は。
六 *そぼふる雨にたゝかれて。
やがて我が身の落ちんとは。
七 *藻にすむ虫の我からも。
八 *花のしがらみ絶えはてゝ。
九 *東風をつてにも春たゝば。
*隱ろふ限り行く〳〵も。

あつき惠をたまひけり。」
日影おほひし藤かつら。
み階のけはひ添へつらむ。」
春立つらしも見ゆるなり。
讒言立つと誰か見る。」
桐の葉落つとうたひしを。
かごとばかりも思はめや。」
思はぬ水脉にせかれつゝ。
流れゆくこそうたてけれ。」
にほひおこせと梅の花。
宿の梢をかへりみつ。」

なほ鄙ざまへこゆるぎの。
明石のうらのとまの月。
十 *須摩の驛はあれはてゝ。
夜すがらこめてさとせ共。
十一 *つきぬ名殘の夜がたりに。
なかぬ里がとほりしたる。
岸によすがも波のはな。
沖に釣するいさりぶね。
そでの浦曲の秋たけて。
心つくしのいそやかた。
十二 *家を離れていつしかに。

急ぐたび路に幾ねざめ。
罪なくて見る由もがな。」
むかふる長の髪ながく。
驚かでやは世の末を。」
しのゝめつぐる鷄の。
心もせめて是非ぞなき。」
かへり咲きすと君見しや。
舵たえたると君見しや。」
我身一つとうたひけむ。
友なし千鳥いかになく。」
かゞなへ見れば三四月。

ひるまもなみのぬれ衣の。
浮世はすべて夢なりと。
うつの山べのうつゝにも。
*十三思へばこぞとなりにけり。
下したまひし御衣は。
衣ささらぎの寒き夜に。
あやしき風の心地にて。
窓のこぼれのこほろぎの。
夜はとことはに静まりて。
四堂のあたり春たてば。
しづ心なく吹くかぜに。

こぼるゝ涙百千條。」
悟れどさすが朝な夕な。
寝る間も思ふ都かな。」
菊のうたげのかしこみに。
今もかしづく御かたみ。」
み簾の外よりふきいりし。
かりそめならぬ病の床。」
なく聲ごとにくだちゆく。
心ぼそさをそへにけり。」
主なきやどを守りわび。
こぼるゝ梅の花幾瓣。」

あらぬまが罪おはせられ。
つゆも恨みのねにいでゞ。
臣の鑑とのちの世に。
神とたゝへて末の世に。
さらばよ仰げこの君の。
浦に鹽汲む海士の子も。
いづれ學びの海漕ぐも。
みなもろともに此君の。

* * * * * * * *

さすらひ果し身ながらも。
都をしぬふまことこそ。」
いつぎ祭れる故なれや。
か寄りまつらふ由なれや。」
千年の祭りかしこみて。
山に薪を樵る賤の男も。」
文の林を分けゆくも。
千年のまつりかしこめや。」

一* みすの内なる薫りはたき物にて源氏若菜卷にみすのうちのかをりをもふきあはせてとあり
二* 月輝如晴雪　梅花似照星　可憐金鏡轉　庭上玉芳馨……菅公

三 久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな……菅公母夫人

四 送春不用動舟車　唯別殘鬟與落花　若使韶光知我意　今宵旅宿在詩家……菅

五 朱雀院御題「春生二柳眼中一」

六 聲寒絡緯風吹處　葉落梧桐雨打時……菅

七 流れゆく吾身もくづとなりぬとも君しがらみとなりてとゞめよ……公

八 こちふかば匂をこせよ梅の花主なしとて春な忘れぞ……菅

九 君がすむ宿の梢をゆく〳〵もかくるゝまでにかへりみしはや……公

十 驛長莫驚時變改　一榮一落是春秋……菅

十一 なげばこそ別れをいそげ鷄のねの聞えぬ里の曉もかな……公

十二 離家三四月　落淚百千行　萬事皆如夢　時々仰彼蒼……菅

十三 去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸　恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香……菅

御衣の雫

筑

夜をいねがてに眞萩摺。
思ひみだれてむぐろふの。
宿のしらつゆおきてのみ。
吾はこの夜をあかすなり。

萩の葉風にちり〳〵と。
こぼるゝ露をうれたみて。
見上るそらにはなれ雁。

聲もかすかに叫びつゝ。
あはれ悲しの雁のねや。
さらでも今はひとりして。
うらぶる身とはなりにしを。
汝もさすらふか友なしに。

さらばよいかに天つがり。
なきくらべてむ此夜半を。
なかねばつきぬわが思。
泣くぞせめての慰さなる。

ひとりある夜は中々に。
長き嘆きをすまの蜑。
しほだれ衣ひるまなく。
物をこそたゞ思ひしか。

こよひは聲を限りにて。
なけや悲しき音の極み。
汝をぞ今は獨り泣く。
夜半の友ともたのむなる。

月はさやかにてらせども。
なきわが罪をあかし得ず。
風はきびしく吹きまけど。
わが身のうさを掃きやらず。

世はむぐろふにちる露の。
はかなきものと知りながら。
がぎり知られぬ大きみの。
めぐみの御衣かしこさよ。

御衣をゝがむ時のまは。

心はいつか九重の。
雲井はるかにまひのぼり。
君の御前にはべるなり。

君の御前にはんべりて。
國をもすくひ世を救ひ。
わが身にあらぬ此の罪の。
名もすくひ得し心地かな。

見渡す野べにゆきちがふ。
道はさはにもあるめれど。

かなしやもとの都へと。
かへらむ道のなき世なり。

とかくに思ひみだれては。
一しほみちになるみ潟
さすが干潟はあるものを。
わが袖のみはひるまなく。

何れのがれぬ浮世には。
汝より外にかたらはむ。
友はなき身ぞいざさらば。

雁よ今宵をなきあかせ。

されどもなほもつれなしや。
汝はくれゆくこの秋に。
やがて歸らむ七重八重。
思ひこしぢの古巣へも。

かゝらむ夜半を吾をまた。
心つくしにのこされて。
かへらむすべもなみだにて。
獨りや泣きて明かすべき。

あゝ如何にせんとても吾は。
このまゝにてぞ徒らに。
心つくしの山がくれ。
埋木とつひに朽ち果てん。

さらば名殘に一聲を。
かなしき限りなけや雁。
汝と相泣く今宵こそ。
これ吾命の限りなれ。

今一たびを限りとて。
拜む御衣にちりかゝる。
雫はさてもなく雁の。
おとす涙か名殘とて。

＊月光似レ鏡無レ明レ罪　風氣如レ刀不レ斷レ愁……菅公
＊あし引のかなたこなたに道はあれど都へいざといふ人のなき……菅公

さよ霞

蘭舟
筑水

軒端の柳影さえて。

煙にくるゝ夕まぐれ。
衣をかへす風さへも。
忍ぶのむぐら亂しつゝ。
千々の巷になよ〳〵と。
春の姿は見えつれど。
わが世の爲の春ならず。
世にすみがての身となりて。
垣根に花は匂へども。
園生に鳥は來鳴けども。
いつか心のもつれ草。
露しもうさをはさやらず。

さても世ざまのつたなきは。
庭もの梅よいましこそ。
よくも知るらめ上つ枝に。
わきて嵐はあたらずや。
さらばよ告げむ上つ枝の。
風のならひの今にして。
忽ち身をばかへむとは。
いかでか思ひはかるべき。
枯れなばともに同じ世の。
嵐にとてもおもひしが。
忍びぬ汝もすてものに。

たゝねばならぬ旅衣。
あゝ今更にせん方も。
なみだの露の玉かづら。
頭挿の花もしほ〳〵と。
月さへぬらす袂かな。
人のこゝろはかくれ沼。
定かに見えねみさび男の。
友は何とも岩清水。
すみ濁るをば神ぞ知る。
よし身はやがて磯馴松。
いそうつ浪にさらはれて。

底ひしられぬわたづみの。
もくづとなりて失せぬとも。
嵐の夕雨のあさ。
君し守りて手束ゆみ。
こゝろはいかで木綿垂の。
神にかけてもかゆるべき。
さらばぞたのむ梅よなれ。
今こそわれはいでゝゆけ。
ゆきての後も汝のみは。
まさきくひとり香に匂へ。
なほも情をかへざらば。

又も花さく小春日に。
緑の羽のうくゐすの。
歌もありとや知らせてよ。
*そよふくこちに言づてゝ。
主なしとて忘れでな。
やよいとし梅さらばいざ。
今たちわかれいでゝ行く。
今を限りの言の葉を。
家出の名殘くりかへし。
汝はまさきく年なべに。
都の春を守れかし。

かくていよ〳〵榮えなば。
せめてもかくせ紫の。
藤のかづらをさかしまに。
今はなれこそ朱なれや。
さらばよ果ても白雲の。
しらぬ旅ぢのつくしがた。
重ぬる波の夜な〳〵は。
思ひぞいでん古郷を。

* * * * * * *

出でゆく先はさよ霞
つゝむまがきと立ちこめて。

月も涙かおぼろげに。
いづこの果てに沈むらん。
いまだならはぬ草枕。
今日わけそめていつ迄の。
いつと限りも白ま弓。
みやこの空や隔つらむ。
朧ろ都の月のみち。
振りすてがちにきてしより。
はや久しくも旅ころも。
日數つもればいつしかに。
こゝは名のみの須磨の浦。

片しく衣に潮垂れて。
ひるまもなみの底ふかく。
及ばぬまでに思ふ哉。
涙にくるゝ天つ原。
御空にかゝる月さへも。
浪のまに〳〵夜もすがら。
かつ〳〵われてうつれるを。
さらでも脆き人の世の。
住むとやいはむうたかたに。
よるべなき身はいつまでの。
なげきをさてもしぶきして。

寄せては返し返しては。
又よす浪の數となく。
思ひみだれてあかし浦。
あかぬ眺めは昔にて。
今は涙のいで舟の。
漕ぐ子のかひなつかれ果て。
はてあるまでをつくし潟。
つゝがもあらで着かれけり。
あはれ鹿鳴く秋のくれ。
つくしの空よさらばいざ。
やすげく公を守りてな。

都の風のよばふまで。

＊こち吹かばにほひ起こせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ……菅公

入るさの月

筑水

蘆火たくてふ津の國の。
浪速の城につかへしが。
二代ふるまに浪速がた。
前よの猛者もおほ方は。
父のたけきに似たまはで。
物ごとつねにたわがちに。
さる城主はそのはじめ。
いみじくまめに盡し鳥。」
むかしにかはるきほひにて。
亡せにけらしな振はじも。」
二代の君は柔にして。
小夜に泣かじや函の太刀。」

まめなるさがのそのまゝに。いはでやむべうあらざれば。
落葉しげみのしば〳〵に。いさめもをせど甲斐もなみ。」
まごゝろこめし言のはの。露もきかれぬくやしさに。
臣のつかへは果てしとて。行くへをまたくくらめけり。」
さるにのこんのその妻は。かなしいかなや愛兒なる。
八歳の兄とみつとせの。妹もろともにとらはれぬ。」
さて城内のかごかなる。所にすべてこめられて。
せしのび衣はなれ鴛鴦の。ねにのみぞなく明くれに。」
その婢女に小萬とて。かひ〳〵しうも侍るあり。
いづれ宿世のまたあると。折りに慰めまゐらせつ。」
ほのかにきけば都なる。清水の寺に我主は。

おはするよしを人のいふ。いかでそこまで落ちませと。」
いとねもごろに告げゝれば。いかにもがして行かばやの。
心くるしやくだかけの。そらねにあけぬ關にして。」
人目しげきに煩うて。しばしためらひやめけるに。
小萬は城のぬけみちを。深くかうがへ沈みしが。」
水門よりこそぬけいでゝ。夜の淀川渡りなば。
やすくはべれとすゝめつゝ。かたの如くにしのびけり。」
やがてみづから物見とて。川のも泳ぎ向ひなる。
とある木影につけし身の。たからの袋かくしとめ。」
またもおよぎてかへるさに。こぎ捨小舟見いだして。
身は水なかにひたりながら。舟を押してぞもどりくる。」

折りしも神のたすけにか。
流れきたれば拾ひとり。
水なれ棹としいへれども。
波のしづくかはた露か。
いづれ浮き世とさとりても。
授かりしやは神つより。
汗ならなくにぬれ衣の。
いつしか岸につきにけり。
かくせしふくろとりいでゝ。
たど〳〵しくもたどり行く。
あたりのしづの女房が。

水なれ棹さへ水上ゆ。
さて恙みなくかへりけり。」
身なれぬ棹をさしぐむは。
世のすべをなみたのみ無も。」
波にうきよと生はりて。
よりかけいとの亂れがみ。」
しどゞになりて漕ぐほどに。
ささくとねぎし甲斐ありて。」
がげほのぐらき月影に。
なほさきかれとねぎながら。
物の詣でのけはひにと。

取りなしけれど中々に。
夜明けゆけば路すがら。
たゞの人とは見えずなど。
いそぐたどりの磯ならず。
いとむくつけきよそひなる。
男はつねにあとやさき。
何處をあてにおはすらむ。
清水詣でのものとのみ。
思ひありげにあとも見で。
五條わたりのひんがしを。
わるものどもを引き具して。

いづこかあでの姿ぶり。」
行きかふ人の見咎めて。
いふを聞くにもいそがれぬ。」
山崎といふほとりにて。
ひとり男にあひにけり。」
つきまとひしてありにしが。
人ぞと此方にとひかけぬ。」
いらへすぐればその男。
走りすぎけりひたはせに。」
いそぐ折りしも許多の。
さきの男ぞ追ひさける。」

四方よりこちを蛛蜘のいの。
聲いらゝげてこち妻は。
わがゆくさきを遮るは。
事しもあらばいで物を。
一人いへらくその若子は。
おはする方へ送りつけ。
そのつぎのには女房の。
一世をこめしつまごめの。
またそのつぎは婢女の。
よき物こそと思へたれば。
かくいひあへず犬じもの。
圍みしすればおどろきて。
こはなめしきや山だちら。」
何なればかと罵しりつ。
見せむとばかり身をしめぬ。」
たゞ人としも見えざれば。
引きで者をばのぞむなり。」
みめうつくしくおはすれば。
わが思人にのぞむなり。」
身にしつけたる袋には。
そをもとらんとのぞむなり。」
えせ事せむとしかゝれば。

こちはかねても身に添えし。
山だちどもは手取りにと。
切りたてられて堪えじとや。
いかゞにせしぞ山だちは。
いかで人手にわたさんと。
そのしれ者の首うちて。
今は限りと思へければ。
小萬もこれを限りとて。
六人はいつか伏せられて。
もとの心はいづこにか。
身をもろともに秋のはの。
あひ口ぬぎて切りまはる。」
あしらひにしがこち皆に。
逃げむとしては又つどふ。」
若子を奪ひて逃げむとす。
いらだちふるふ妻のわざ。」
若子をも共にぬきつらね。
四人までも切りふせぬ。」
くるひたけりて戰へば。
なほ來よがしにふるまひぬ。」
山だちどもはえもたへで。
ちり〳〵逃げて去にけり。」

この變動に數しれぬ。
妻は清水の馬とゞめ。
せめて小萬よ父君に。
聲をのみしと思ひしに。
妻がよみけむ曉の。
などいねがてのさを鹿の。
小萬はふとの嘆きにて。
あまり妹ごのいとしきに。
さて近きへの寺へ入り。
からをかくして後の世の。
こゝはいづこと問ひけるに。

手疵を負ひて堪へぬげに。
休らひふしてうめきつゝ。」
妹を見せよといひさして。
はや世の息は絶えてけり。」
月も入るさの山かけに。
夫よびながら亡せしあはれ。」
同じ道にとおもひしも。
力なく〳〵止りけり。」
妻の衣など布施にして。
まつりをたべとたのみ置き。」
清水といふに一入の。

名殘をましてやる方も。
わが指す方のあるじをも。
心しづめてその妹を。
あはれ清水にしのぶ身の。
入るさの月を惜みけむ。

この物語は、三熊思孝の、續近世畸人傳にあるものなりけり。
妻は、其夫と共に、秀賴につかへて、大坂城にありしが、夫の逐電して、
跡をくらましてより、かよわき女の身とて、まだにげ落ちぬまに、とら
はれけるなり。同書に、その妻の人となりをのせて曰く。
この北の方は、世に雙ひなき美人にて、然も箏をよくし、和歌を好み、
長刀又殊に上手にておはしゝかば、此の時もかく懐劍わざにて、荒くれ
者を切りたて給へり。其の詠歌のうち、

なくより外はなけれども。」
尋ね得にたるかなしさに。
思ふあたりにわたしけり。」
幾よねがてに山のはの。
我れにもあらぬうらぶれに。」

＊曉の、月も入るさの、山かげに、などいねがての、さを鹿の聲。
といへるを聞きぬ。かばかりの人の、思はざる難に身まかり給ふこそ悲しけれ。
とあり。又小萬を賛めそやして。
忠にして、智あり。しかも勇猛なるは、世にめづらしき女といふべし。
といへり。
夫の忠、妻の操、また奴の勇、みなこれを人のかゞみともすべくやと、えせ心にもうたふにな。

萩の友摺

時雨は全くやみぬれど。　筑水
雲のゐゆきの怪しくて。

今か再びふりくらむ。
『さらでも秋はまさゞまに。
伴なし雁のたゞひとり。
いかなる由と知ねども。
父の仰せをかしこみて。
旅のよそひをつくゞと。
障子をあけて兄君と。
『今日か兄君いでたゝす。
命もやがて水無瀬がは。
『何とな僅かはつがりの。
男の子の涙そゝがむは。

庭に芭蕉の風さむし。」
うらぶれ多くおぼゆるを。
たゝねばならぬ旅ごろも。」
けふの眞書に立てといふ。
しばし待つ間のさびしさよ。』
物思ひ居ればゆくりなく。
呼びざまに來る人や誰。」
惜しき名殘の悲しさそ。
たえぬ計りのおもひ哉。』
はつか足らはぬ旅なるに。
あまりめゝしと思はずや。』

かくといはれて弟は。
『知らでおはすか兄君よ。
親のひめごと漏さむは。
兄弟の身とは代へがたく。
さても果敢なき母上の。
君をばうきにおぼしめし。
兄はさすがに落付きて。
自からなせし覺えだも。
『知らでおはすが一入の。
忍ぶの草のしのばねど。
そも〳〵母のたくらみは。

いやましみづの涙ぐみ。
いみじき事ぞ起りつる。」
子のこゝろとしあらね共。
今何くれもいひ告げん。」
心のうち社はかられぬ。
なき人にせむこゝろとよ。」
『殺されぬべきまが罪を。
なき讒言におとしてか。』
歎きなりけり兄きみよ。
もらさず告げん秘事を。」
繼子の君をなうなして。

さて自らの腹の子に。
そのたくらみ』といひさして。
あがらめもせで守りしを。
『己れは斯くと知りしより。
いさゝも之を聞まさで。
さらに弟といひあはせ。
父の君がりあるまじき。
父のいかりは只ならず。
八重の山ぞえはる〳〵と。
眞晝にたゝば命なる。
かの深山路をこの夕。

家をとらせむ旨に在す。」
弟しばし聲のめば。
つゞいて兄も聲呑みぬ。」
言葉つくして諫めしも。
うはのそらなる風のごと。」
罪なき君をあしざまに。
さかしら言をすゝめ鳥。」
さてこそ君を使とて。
ひとり旅路に出すなれ。」
小夜の中山ならなくに。
こえむとすらむ身の限り。」

かくて忍びの奴ばらは。
夜半をたのみに梟の。
今は術とてなきまゝに。
月日をよそに避け給へ。
いづれ後より我もまた。
世をうぢ山の苦しさも。
さらばよ家も穩かに。
わが弟を後の世の。
あはれ兄君さすらへの。
二人のなかと昔より。
いかに兄君しばしなり。

君をばやみに待ち設けて。
あらび出づらむたくみ也。」
いづらなりとも暫時の。
父が司さの國の外に。」
同じ旅ねのともまくら。
たのしきのべも共にして。」
母もやすげくこゝろなる。
城の主と立つべくや。」
身となりませと勸めなん。
かけて今まで思はめや。」
父のいかりのやむ迄を。

よその國土へさすらひて。
なれがせちなる情をば。
ほゐなきとと思へども。
浪華にゐふる草ならで。
親の仰せにまめなるが。
何れのがれぬ人の身の。
父にそむきし不孝者と。
されば ゆるせよ兎に角に。
更に惜しとも思はねば。
たゞ願事のひと筋を。
我なきあとは弟よ。

身をさけたべ』と伏し沈む。」
あだにしせむは中々に。
ゆるせ浮世のさがなさに。」
よしもあしきも足乳根の。
眞の子たる道なれや。」
仇なるいのち長らへて。
世の口のはにのるつらさ。」
父故すつる我命は。
露もうらみを何いはむ。」
今はの言にのこしてん。
一入孝にまた幸きく。」

我にかはりてふた親に。
一つにつくしまゐらせよ。
たのむぞさらば弟よ。
言葉をかたく身にしめて。
『さはさりながら兄君よ。
自らします事ならば。
今しはあらぬよこ道に。
やがてはもとの玉鉾の。
さるに我身をむざ〳〵と。
これわがとても弟の。
かくとすゝめて懇ろに。

我れとなれとが赤心を。
これぞ此の世の願なる。」
忘れな果てぞ此世なる。
守れ』といひてむせび泣。」
父がまことのこゝろより。
とかくも術はあるらめど。」
迷ひたまひし事なれば。
ますぐのみちに返るらん。」
あたら殺しにさせんとは。
心に認めぬ限りなり。』
くどけど兄はえも聞かず。

怒りの色をあらはして。
『汝も男子にはべらずや。
猶めゝしくもとゞむるは。
なれは知らでか父上の。
父の言葉ぞいざさらば。
父のためとて死なん身を。
世にえせ者と笑はせむ。
たしなめければしかづかに。
こぼるゝ涙うちはらひ。
『かぐまで勇みましますか。
宿世なればか禍事の。

稍あらゝげし聲音にて。」
けなげに我れは勇めるを。
兄弟の禮にあらずかし。」
言葉はいつも兎に角に。
親の仰せにいそしまむ。」
いなみてたゞに止むるは。
なれがこゝろか弟』と。」
今は說くべきやうもなみ。
兄にむかひていひけらく。」
今はとめまじ世の中の。
君にいつくとあきらめん。」

されどもいかに兄君よ。
思へばいとゞ村肝の。
腹こそたがへ父の血を。
幼き時ゆ竹うまの。
學びのすべも諸共に。
同じふしねに人と爲り。
うけし惠みの一つだに。
まが神の手に見ながらも。
せめておのれの心をば。
中にぞこもるはらからの。
さす杯のうれしさに。

これが一世の別れかと。
心殘りもおほくして。」
同じく分けしうから也。
遊びはさらにいはずがな。」
いくさの道ももろともに。
たぐひなくこそ睦びしが。」
酬ゆる暇もあらぬ世の。
殺さす君が幸なさよ。」
くみて受けませ杯の。
情よこれをわかれとて。』
常にはのまぬ酒ながら。

かさね〳〵に乾す程に。
『けふを限りのたいめなり。
いへば二人が打ちまもる。
なほさすまゝに飲み行けば。
はてはあやめも我しらに。
紅葉のごとき兄の顏。
『これぞこの世の名殘なる。
あはれ君をば秋の葉の。
瑞枝さしそふ身の榮を。
我だに死なば君が身は。
心みぢかき事をして。

紅葉するまで醉ひにけり。」
あかぬ別れの顏見ん』と。
かたみの目より雨しづく。」
爪のさきまで赤らみて。
倒れて遂に熟睡せり。」
涙ながらに眺めつゝ。
ゆるせ兄君わがこゝろ。」
ちるにまかせてわれ獨。
いかでかたゞにほりせんや。」
安けからま卒しさらば。
世にあやまちをし給ふな。」

さらば』と兄のぬる顔に。
しるしの旗をとりもちつ。
小庭にいでゝそこはかと。
さて何處とも白旗を。

＊　＊　＊

よびつよばれつ兄弟の。
詮方なくておのかじゝ。
互みの心はあかねさす。
夕のかねにおどろきて。
弟あらず旗もなく。
そのおどろきはそも如何。

＊　＊　＊

暇をつげて使する。
しづかにそこをぬけ出でぬ。」
父の館をふしをがみ。
とりて行くへの霧ふかし。」

＊　＊　＊

深きえにしも今さらに。
別れにそゝぐ血の涙。」
日もいつしかにかげろふの。
まどろみ覺めし兄の側。」
杯のみぞ倒れける。
わなゝく足をふみしめぬ。」

『さては我をばだしぬいて。
ふかき情を身にくみて。
つゆ嗜まざるその酒を。
今さら悔ゐて何かせん。
氣をいらだてゝ蘆穂山。
我家の城も遠うなりて。
秋の末野の田のくろの。
いとものげなく立つさまは。
道の行く手の露ふかく。
しどろもどろに折れふして。
なほひたはしり行く程に。

自ら代るつもりよな。
いつか心の弦ゆるみ。」
しゐて飲みしは過ちき。
疾く〳〵ゆきて助けばや。』
あしもしどろに馳せ行けば。
あとは小霧に見えわがず。」
稻かりはてゝそぼつのみ。
たとしへなくも哀れなり。」
うらぶれはてし葛の葉の。
うらみがほなるさやぎ哉。」
遠里小野ゆきこゆるは。

秋さり衣誰がために。
わりなく仰ぐ大空に。
つらも亂さず飛び行くは。
野みちもいつかすぎぬれば。
夜はやう〳〵にくだちつゝ。
森の下かげさむげさに。
われかのさまにおびえつゝ。
こゞしき岩の九十折。
笹葉の露をわけゆけば。
千さとのほかの奥山か。
こゑにけらしな踏みしだく。

急ぎうつらむ砧ぞや。」
衣かりがね四つ五つ。
越路の旅やいそぐらむ。」
並立つ松のかげくらみ。
木立がくれの月すごし。」
心もいたく冷えいりて。
汗もしどゞに落ちまさる。」
のぼりつおりつ柔撓。
袂もやがて朽ちんとす。」
五百重つゞきの峰々も。
落葉の音に知られけり。」

對ひの山のかひならむ。
わびなきするか小男鹿の。
わが弟をすけばやの。
行く手より吹く風凄み。
折しも木の間もる月の。
俄かに蹈みしし旗の。
さてはとあたり見まわすに。
よく〳〵見れば首と足。
『髪の毛亂れ草のごと。
唇かたく結べるは。
おもはかはりて土のごと。

夜寒の床のいねがてに。
聲にふけゆく夜半の路。」
心一つの暗路をば。
えならずくさき息吹哉。」
影てりまさり路さえぬ。
染むや血汐に紅葉なす。」
亡骸一つ倒れけり。
處もさりしていたらく。」
顔色あせて青ざめぬ。
我をうらむにあらざるか。」
まだらにそみし血色哉。

眼をふかくふたげるは。
あはれ吾身を打ちすてゝ。
何もてこれを酬ゆべき。
枉げて好まぬ酒ながら。
神ならぬ身のくやしさよ。
我を殺すにしのびずと。
いかでたゞに見殺して。
さらばこれより五爪の。
住みはてんより誠ある。
いざや』とばかり太刀ぬぎて。
木魂にひゞく物の聲。

我を怨むにあらざるか。」
代りしなれがなさけには。
はかなき世には術なくて。」
汝ゆゑのみし其果は。
かゝれとてしも知らざりき。」
汝が身代りを我もまた。
ひとりや殘る仇し世に。」
たつぎもあらぬ世の中に。
汝ともろともに黄泉の旅。」
腹を切らむとする刹那。
ましらにあらず鹿ならず。」

『やよ犬じもの奴ばらよ。
うちしおこ者いざ來れ。
忽ち消ゆるつきのかげ。
稲妻ひとりきら〳〵と。
いつしか太刀の音やみて。
萩の友ずりしみ〳〵と。

* 命なりけり小夜の中山
* わがいほは都のたつみ鹿ぞすむ
よをうぢ山と人はいふなり

我が弟を暗うちに。
互みにくみて鬪かはむ。』
天ぎる雲のくろうして。
暗にきらめく太刀の音。」
吹く風まして凄味あり。
木枯しまじり時雨めく。」

西行法師

喜撰法師

座行車

筑水

すぎの木だちに梟の。なく音寂しく夜は更て。
梢をのぼるつきかげや。箱根八里のやまのおく。
丈ものぶらむ凄さには。心とはせでしづ〳〵と。
かゝる山路の凄さをも。駒もとゞろに蹈み鳴し。
手綱あやづる武者一騎。飽くまで猛者のけはひにて。
夜のしづけさを破りつゝ。小栗判官助重と。
凛々しき武者の人振は。
これぞ名に追ひ知られたる。

世に隠れなき男子なる。一色ばらが鎌倉の。
心ひとつの父のあだ。羽をのすよしを聞きければ。
關東管領の館にて。幾そのわかれ浮瀬川。
さても出でたり仇討に。爲めとしあればせん術も。
幾瀬せかれてせゝらぎの。思はぬ方に心のみ。
うけれどさすが亡父の。後をこふるとあらざれど。
泣くわが妻を後にして。鐙しむれば一しきり。
えも思はじと思へども。
思ひゝかれて今更に。
かへりみするは何心。
我からおぞと覺えずも。

空を仰いでなく駒の。
おろすか八里麓まで。
折しもまがみ呼ふにか。
麓よりしておどろしく。
近づくらしも何ならむ。
忽ち見ゆるをちかたの。
つはものならぬ裝ひに。
大刀をもちたりおのかしゝ。
小栗は暫時駒の手を。
こはそもいかに山賊共の。
やんごとなきと咎めたる。

息吹におこる山風。
はた夜嵐のすさぶにか。
聞ゆる聲の我かたへ。
麓のへよりのぼりくる。
五十ばかりなる人數が。
ゆるめて後を見守れば。
追ひくかあでにかざりしを。

『さらばよ逼れ征途の。
殘らず斬りて呉れんづ』と。
えも犯されず見えにけり。
『木のはざま漏る月影に。
のる小栗にはあらざるか。
かぎりと知りて定めせよ。
動きなそこに立つまゝに。
山賊の頭梁と知られたり。
ほくそ咲ひつ見守りぬ。
『こはまた如何に汝が貌は。
いづれわが仇一色と。

まづ血祭りに痴者を。
身をかまへたる武者振は。
照せば汝は鬼影に。
僻目ならずばやよ小栗。
たゞ一打ち』とのゝしるは。
小栗はなどて驚かむ。
名さへこゝろの横山か。
むすびし汝よさらばいざ。

かへり打ちせむいざ逼れ』
俄かに夜半のやま奥は。
五十の山賊共一そろひ。
あなづらはしく一人とて。
小栗たしろくことやある。
暴虎憑河のいさほひに。
山賊もえ寄らずおぢたりな。
駒の蹄にけられしか。
世に荒駒と人の知る。
誰がいさぎよく寄り來なる。
駒もろともに躍り入る。

朱羅の巷とかはりけり。
打つてかゝるか小栗をば。
小栗ひるまむ事やある。
くるひたけりて戰へば。
駒の齒がみにかゝりしか。
この鬼影のわきへには。
小栗が大刀の手ばやきに。

こゝにも一人あなたにも。
また四つ五つ續けざま。
早くも山賊は見るひまに。
こは及ばじと思ひけむ。
かこみて矢をば射り出でぬ。
切りぬけ〳〵防げども。
そゝぐ矢數に中られて。
刹那のうちに落ちに鳧。
『こは此處にして果てむには。
打ちもえならずなりやせん。
さゝのさやぎは今ならず。

二人三人と倒れたり。
ほと〳〵半倒れたり。
駒をさかりて犇々と。
たまるものかは雨あられ。
小栗は今はあやうくも。
まことめざせる父の仇。
横山ばらの笹の葉の。

また後の日に一薙ぎに。
けふは恨みも遺れども。
山賊は披きて岐れたり。
名にし追ひたる鬼影の。
追ふとていかで及ばんや。
かくろひはてぬ山陰に。
岩角木の根ふみしだき。
月のかけぢをかけゆけば。
迷ひやしつる谷の底。
かへりみすれば山賊は早。
しづめて更にすゝむ程。

なぎ靡かすは易ければ。
先づ避くべき』と駈け入れば。
逃ぐるを山賊の徒歩ながら。
いつしか駒は雲かすみ。
九十折なるやまみちや。
いつか岐れの路にして。
追ひも來ざれば心をば。
池の湄にいであひぬ。

何ぞもおどろ又ひゞく。
池のも見ればむら〳〵と。
湧き立つ水は山彦と。
鬼の哭くらむ聲すなり。
『これや箱根のやま奥に。
一つなるらむさても世に。
小栗は池を周り行く。
忽ち駒のいはかどに。
なく聲すごく一まろび。
池の中へと落ちにけり。
駒を馴らすに長けたれば。

簇がりのぼる湯の焔。
なり響きつゝさながらに。
ありと聞えし湯の谷の。
怪しきものを見る哉』と。
躓きたりと見るひまも。
小栗は鞍の上ながら。
手綱を疾くにあやづりて。

岸には躍りあがりしも。
いかでか將てたえられん。
暫時たりとも熱き湯の。
浸されたりし事なれば。
身はいみじくも爛れたり。
今はいたみもたえ難き。
しばし默えてありにしが。
再び泣かぬしづくなれ。
『わがいとほしの鬼影よ。
聞けかし汝をたのみにて。
汝はわがほしき駒にして。

何かは以てたまるべき。
もゆるばかりの池水に。
駒も小栗ももろともに。
無念の齒をばかみしめて。
思はず落つる涙こそ。
心しあらば耳とめて。
いはむとすらむ我言を。

今はむかしのものがたり。
主を助けし奇しき名は。
いづれたゝへぬ者はなし。
心しあらばなれよ駒。
え立たぬ我を人里へ。
馬頭觀音と崇めてむ』
類稀れなの駒なれば。
言葉を聞きや分けにけむ。
再び起ちぬしほらしも。
小栗は駒をかいなでつ。
やう〳〵まとひつきたれば。

劉先生の的驢馬が。
後の世までも傳りて。
什麽にたのむぞ一歩も。
送りすけなば汝を世に。
ねもごろに說くわが主の。
我も同じく爛れしを。
をろがむばかりよろこびて。
おぼつか乍ら乘せて行。

駒もむかしに似ざりけり。
夜乍ら月のさえ〳〵て。
光りも漏らぬしげり木の。
咫尺もわかず脚の下。
さらでもなづむ狹路なるに。
あえぎ〳〵行くほどに。
大地をうちて倒れたり。
倒れしまゝに鬼影は。
わづかの息をなしたるが。
弱るがごとく消え入りぬ。
駒さへ今は死しければ。

眞晝に似しが忽ちに。
葉しげり陰の狹路となり。
病みさらぼひし駒なれば。
いかゝしにけん木魂響。
つもる疲れの耐えがてに。
枯れ行く秋の野の虫の。
たのむたつきを失ひて。

我まゝならぬ身にしあれば。
情乞はむと待ちにけり。
夜も丑滿の頃にして。
身の毛もよだつ凄さをば。
いかに思ひの增さでやは。
まいて夜寒の山風の。
寒は骨に徹るまで。
いたむを何と忍ぶべき。
谷にましらの鳴き叫び。
それより外は更に又。
箱根八里は世の外なる。

明くるをまちて來む人に。
たゞすら山の奥なれば。
なやみし人のたゞひとり。
濡衣はらふに一入の。
爛れし皮のたゞならず。
峰に狼の吼ゆ聲す。
音なふものもあらざれば。

明けよ〳〵と祈れるに。　やう〳〵しらむ東雲の。
空に旭日もさすならむ。　それとは見えぬ樹の杪に。
誰がため人を呼子鳥。　旭日も漏らぬしげみ陰。
げに理りや明けてさへ。　泣きあかしたるその恨。
夜すがらひとり暗中に。
しるか鬼影斃れたる。　仰げばしげみかげくらく。
天つみ神よすけませと。　俯すれば山は靜かにて。
國土の神よあはれめと。
駒のむくろに露寒し。
『あゝをしからぬ身ながらも。父の仇をし討たぬまは。
空しくたゞに死なめやも。　生きて一太刀負はせずば。

死靈かけりて咀はゞや。　佛しめぐみ垂れたまへ。
神し守りてましませよ。　うらみの仇を討たざれば。
居行よりても亡父の。
八百萬年眠らまじ。』
神代ながらの山奥に。　いねたるまゝにまれ人の。
とく來よかしと待ち居れば。　いつか眞晝となりぬらむ。
木の間もる日の影高し。
*誰かうたひし鴨山の。　岩根し枕ける吾をかも。
知らずといもがまつらむと。　むかしの歌のこゝろさへ。
思ひ合する涙かな。
折しも遠のあなたより。　菅の小笠に杖とりて。

はかどりかぬる足並に。
やつれ姿のをみなあり。
旅にやいたうつかるらむ。
こぼれし髪の雲のごと。
そのかんばせの色あせぬ。
小栗はことによろこびて。
地にぬかづきし幾そ度。
四つの眼をあはせけり。
『おや、おや汝かさても汝。
いかなればこの山にして。
旅の姿のなれを見る。

このつゝら路たどりくる。
物をやいたう憂ふらむ。
風に亂れてうらぶれし。
神のたすけのいみじきに。
もたぐる顔のはからずも。
吾妻照天にあらざるか。
八里の奥にゆくりなく。

仇をうたまく一筋の。
はやりかけしがこはいかに。
今は自由もならぬなり』。
『こはわがせこの君にいま。
このさまいかで妻にして。
せこよ無念はいかばかり。
君があづまの旅立ちに。
夢に越えたる箱根山。
夜を日につぎて今ぞこゝ。
よしやかよわき腕とも。
君が仇をしうつ太刀の。

矢竹心にはやり猪の。
あやまり落ちぬ湯の谷へ。
相見てうれしと思ひきや。
ますぐも目をばあてられん。
ひとり後れしくやしさは。
女の脚のはかどらで。
いさゝか身には覺あり。
手傳へもがなせまほしと。

かくは後よりいでしなり。
さあれわがせこ今の身を。
小栗はなげきうなづきて。
神もあはれとおぼすらむ。
かくまで汝が我を戀ひ。
われは汝をばつれゆかば。
甲斐なき業となるらんと。
思ひたればぞ古郷に。
箱根の山のみねつゞき。
忘れやはする末かけて。
とにかく今は人里に。

いかにすべき』と泣きふせば。
『よくこそ來たれ汝が操。
操立つるにゆるしてよ。
まとひとなりて中々に。
ひとり汝のみ殘したり。
幾重に汝がま心は。
我を送れ』とくれ〳〵も。

たのむ言葉のかなしさに。
湧き立ちかへる血の涙。
やがて小栗は鬼影の。
まめに仕へしかたみとて。
幾夜を後に露むすぶ。
妻が小栗を背負ひつゝ。
あとはつゝむが夕霧の。
かなしき聲に送るなり。
さても小栗はその妻に。
埴生の小屋のいぶせきに。
及ぶかぎりにしづめけり。

妻はいよ〳〵泣きまさり。
なき骸あつく葬らせ。
しるしばかりの石たてぬ。
そこはかとなくおり行けば。
むらだつ中に何鳥ぞ。
負はれてとある村里の。
宿を覓めて身のきづを。

されどいみじきさづなれば。癒えざるのみかやう〳〵に。
重り行くこそうたてけれ。今はきづより腐れ入りて。
病態のたゞならず。
爛れし肉はいつしかに。ふくれてあしき香さへ。
その室内にみちわたり。我から我をきらふまで。
姿はまたく代りゆく。
かくてはとてもたやすくは。えも癒ゆべうはおもほえず。
人のすゝめにこのきづは。熊野の湯こそ著く。
功顯はあれとき〻ければ。
眼に見ゆる鎌倉の。仇もよそめのくやしくて。
まぶかに顔をかくしつゝ。網代づゝみの身に代へて。

坐行車にのりて行く。かばかり猛者のいつのまに。
昔は世にもはやされし。無下にいやしきよそほひに。
今は乞丐となりはてゝ。
世を忍び行くつらさ哉。あまり浮世はあぢきなき。
前世のすくせあればとて。羅沙草樹の曉の花。
祇園精舎の暮の鐘。
常ならじとは思へども。入る日を回す手力も。
一たびふるふ大刀先に。出づる日落す勢も。
一たび吼ゆる駒のねに。渡りわぶらむ槻弓の。
さめたる夢とふりにけり。
『霜さゆる夜は橋の上に。

こやる乞丐とひたすらに。　あはれがりしも昔にて。
恵みしせしもむかしにて。
霜ふみわけつ濱洲鳥。　足もなづみて枯野原。
わたる子らよとひたすらに。　あはれがりしもむかしにて。
はぐくみせしもむかしにて。
今はわぎみぞ世の中の。　人目をはづる身となりぬ。
坐行してゆく道すがら。　里のわらんべ打ちむれて。
あれよとそしるつらおもひ。　そびらを仇にいかでとて。
思へば思へばいでゆかば。　みす〳〵仇をよそめにて。
立ちて來にしを思ひきや。
坐行ながらに歸るとは。

げに世の中のえせ者は。　我をいかにか笑ふらむ。
惜しくもあらぬうつせみの。　いのちをあたら長らへて。
生くるとばかり浮言に。
さらば何ともいひなせや。　今われ何を論へむ。
世は世のまゝにまかすべく。　身は身のまゝに任せまし。
浮世もよそに身もよそに。
いづれふたゝび身のきづの。　全く癒えなば一ふるひ。
世をもけなしていぎたなく。　さめはしつれどさながらに。
眠るえせ者起ゝせばや。
あはれこのまゝ埋木の。　あらはれ出づる最上川。
沈み果つべき身ともなし。　いざしばしまて世の目をば。

ふためくばかりさわがせん。
されば よいかでうらむべき。
すくせなれば ぞかゝるらむ。
あきらめられね 得もまたく。
あはれ 吾身のさちなきは。
妻がかよわき性にして。
おどろに髪も亂れたる。
世が春ならばあでやかに。
わがため同じえにしにて。
立ちふるまふぞいとほしき。
『あな吾せこよいたづらに。

身にいつぎたる禍事も。
さりながらまだしかずかに。
とかくに思ひ消なせども。
世にむすぼれしこの姿。
若木のさくら見るべきに。
うさにも漏れずいみじくも。
物なおぼしぞ思へばぞ。

なほやつのらむ御いたみ。
いかにもなれや惜まねば。
のう吾脊子よゆるしてよ。
よわきかひなを如何にせん。
いかばかりなるわびしさぞ。
げに甲斐なきは妾にて。
思ふがまゝにふるまひて。
はかどりかねる足なれば。
あはれ車をひきそめて。
妾はつねにはげみても。
路の半もまだ越えず。

夫故果つるわぎのちは。
力のかぎりはげめども。
進まぬ足のはかどりに。
女の身なるはかなさは。
車ひきゆく事ならず。
はや過ぎたりな小半月。
女の脚のはかどらで。

さらでも旅はものうきに。　この御いたみにまたそへて。
かしづくものゝ甲斐なくて。　物毎まめにあらざれば。
足らずがちにやおはすらむ。　仰せたまへや徒らに。
何事にませ用あらば。　妾はいかになるとても。
物をおぼさでそのまゝに。
君故何のをしからむ。』
『こはうれしくも思ふぞよ。　なれがまめなる心には。
座行となりし身もしらに。　旅ぢのうさもわすれつゝ。
幾日をさても送りけむ。』
げにわが妻よゝく聞きね。　旅ぢのうさは忘れても。
なれが心のうれしさは。　此世は更に黄泉にても。

忘れやはつるとこしへに。』
『いやとよせこよそはあまり。かしこみ多くはべるなり。
妾がこゝろつくしても。　いつの世にかも最も厚き。
めぐみをむくいまゐらせん。
たゞ願事の切なきは。　はや癒えましてみ心の。
まゝに仇をしうちとらむ。　その日ぞとくに來よかしと。
いのらむ外はあらぬなり。』
『さればぞわれもそればかり。わすれぬ胸の思ひなり。
なれが操のいみじきに。　やがても神の助をえて。
仇をうつらむその日はや。』
袖の上ならず道芝に。　露おきあまる朝まだき。

小栗がうさに沈むとき。　いらなく妻はふるまひて。
夫の心をなぐさめつ。
宿なき野らに虫ばかり。　かごとがましき夕まぐれ。
妻があゆみのなづむとき。　柔に小栗は物いひて。
妻の心をなぐさめつ。
あるは小祠にやどかりて。　ねられぬ夜半をかこちけん。
あるは野原にまどろみて。　零落れしさまをわびにけん。
いつも二人は離れずに。
重山複水いくつ越ゆ。　關雲驛樹幾里經し。
つもる日數の旅にして。　やがて紀伊路や三熊野の。
あてし出湯につきにけり。

關東にさやぐしこ草を。　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
おこせし軍率て行くは。　征伐すとて室町ゆ。
小栗が榮の瑞枝なる。　これぞ昨日のさまに似ぬ。
座行車乃上にして。　あうさきるさになやみしが。
やがていみじき功績は。　妻が操ともろともに。
またなくみ世にひびきけり。

この物語は、稗史小栗判官を、歌ざまに物しけるなり。原想は、もとよりその書によれども、多く之れを潤飾して華を咲かせ、枝をつけたり。されば拙き詩思ば、みな我罪なり。さてその書は講談物にて、こはまことしやかなるやうに聞ゆれども、全く信ずべうもあらず。我れは一二枚拾ひよみたるばかりなるに、前後矛楯せるかど多くはべり。さるにこの

詩形に物せばやとの思立は、たま〳〵小栗の、道行する條にいたりて、ゆくりなく其中に、古謠の如きの文ざまありければ、不圖の心にてなむ。戯れに左にあげむ。

急げば汙の垂井さへ。知らで心の關か原。越えつゝ行けば我夫の。病はいつか醒が井と。きくもうれしき祥なれや。やがて平癒になるならば。敵の首を鳥井本。鏡の山の月影は。湖水に映り曇りなき。父や勇の忠臣の。信を君に聞えあげ。讒者亡びて明らけき。御代に近江の石山寺。大慈大悲の御誓ひ。空しからずば助言の。枯木に似たる身の病い。やし玉へやと。伏し拜みつゝ又立ちて行けば。京花さける。春にも逢しめ玉へかしと。伏見の里。旅ゆく人の足さへも。淀の堤や最都も早過ぎて。日は吳竹の伏見の里。さしも名高き難波津の。昔ながらの橋こと永き。秋の夜明けて朝日影。曳けば引かるゝ小車の。軋らす岸の和田えて。四天王寺へぬかづきつ。八十島かけて漕ぎ出す。海士の小舟の楫をたつ。思ひに同じ身の原。八十島かけて漕ぎ出す。海士の小舟の楫をたつ。思ひに同じ身の上の。寄るべ定めぬ旅枕。古歌の心の哀さを。思ひ和泉の信田なる。森の

楠千枝に別け。物思ふなる古への。人も我事あじきなき。憂世をうらみ葛の里。はるゝ〳〵こゝに紀の國や。和歌の浦涙うちよせて。蘆間の鶴も夫婦連れ。我方も夫に似つけども。我夫鳥の身の病。かこつにあまる涙こそ。汐干に見えぬ沖の石。乾く隙さへ永旅の。日數を經れば漸々と。足弱車曳きつゝも。終に熊野に着きにけり。

＊ 在二石見國一臨レ死之時自傷作歌一首　柿本人麿

鴨山之、磐根之卷有、吾乎鴨、
不知等妹之、待乍將有、

忍ぶ草　筑水

てる日も見えずかきくらし。ふる五月雨のはげしさに。

大内山はあれはてゝ。みかまきの卯も落ちにけり。」
帝はいたくうつせみの。世ざまをなげきまし〳〵て。
しのびてかざす笠置山。さしてさすらひたまひけり。」
されどいづくも雨もりて。松の下かげつゆしげみ。
みけしの袖はぬれがちに。たのしみ甲斐もなみ枕。」
河内の奥にわきいでし。菊の下水ますみにて。
たちまち四方の川の瀬の。塵を洗ひて流れけり。」
いつしかつゞく長雨も。あとなく晴れてたまくしげ。
ふたゝびもとの世となりて。花さき鳥もうたふなり。」
まがみを狩りに用ゐたる。飼馴れ犬はいつの間か。
虎としかはり荒れ出でゝ。また恐ろしき世となりぬ。」

鎌倉山のはやち風。ふきすさみでし勢に。
花ふゞき散る湊川。もみぢ亂るゝ越のくに。」
いでまし所ふけし夜半。み庭の櫻けづりつゝ。
かきてとゞめし丈夫の。言葉の花は匂ふなり。」
吉野の奥にもゝしきの。ふとしきませと柱木の。
かざりにえりし梓弓。やじりのあとは匂ふなり。」
あづまのをくのはなれ城。籠れる赤きまごゝろは。
あらはれ出でゝ水莖の。筆の光りとなりにけり。」
筑紫の野べの夕嵐。にほひを世々にのこしつゝ。
ちりにし菊のその花は。み代の譽となりにけり。」
あはれ吾命うちすてゝ。たゞ君のため山ゆかば。

草むすかばね海ゆかば。みづく屍とちかひして。」
髑髏さらせし丈夫の。奇しき勳は這ふ葛の。
たゆる事なく千五百世に。かたりつぎ〳〵傳へまし。」
ふりし昔を忍ぶ草。ひとり忍べば我れしらに。
袂のそでを絞るかな。涙は雨とおつるまで。」

櫻一木

笠置の山に時雨して。紅葉や色のあせなんと。
さして遙々たのみしも。散りにしあとのくやしさよ。」
されば／これよりこゆるぎの。いそぎてかへるふる里に。
ふる年月をまちにけり。やがて好き日も來べきかと。」

こはそもいかに漁り舟。ほのかにきけば隱岐のしま。
思ひかけなのいでましと。さてもあやしの世ざまかな。
いざ大み駒手綱ひく。馬士ともなりて玉くしげ。
再びもとの都邊へ。かへしまつらむこのかいな。」
兎みち角みちすぎ坂の。峠の雲を分け入りつ。
船坂山のわだのそこ。ふかき小霧をひらきつゝ。」
いでまし所夜やふくる。たく篝火のかつ消えて。
花の下つゆまどろめる。衞士のすがたのあな憎くや。」
遠寺の鐘のつく〳〵と。思ひかへせばとても我が。
手ばさむ弓の篠矢竹。引くべきすべもなかりけり。
いざ此上は心だに。しるしとめてん花ぐはし。

櫻一木をかき削り。かく文字のあと幽しやも。」
あはれとゞめし唐歌の。からくれなゐの眞心は。
さすがにこれぞ敷島の。大和の花のにほひなる。」

常盤木

筑水

たゆみがちなる歩みして。
片山あらしうら寒く。
たゝねばならぬ旅ころも。
あげまき三人伴ひて。
さして行くへもしら雪に。
馴れにし里をいで立てば。
肌も爲めにさけむとす。
つらや浮世のさがなさに。
わが亡きせこのかたみなる。

雪の古るみち立ち迷ふ。
春は小霞むこちの山。
秋は紅葉すふもと川。
かはる此境遇をいかにせむ。
笹の雛のいさゝがは。
葎が門の小松原。
たゝねばならぬ旅ごろも。
幾とせすみし馴れの里。
されど浮世のさがなきに。
たゝねばならぬたび衣。
今しもあはれ若草の。
匂ふ姿もむかしにて。
岸の眺めはかはらねど。
なほもゆかしき音にいでゝ。
けふもめでたき色なれど。
いかですつべきえもすてじ。
住むべき里はあらざれど。
綠のちごはあたゝかく。

母の肌に眠りつゝ。
いかなる夢かむすぶらむ。
のこる二人は右ひだり。
知らぬか母の胸の中。
をもへば重き笠の雪。
かへりみがちにすぎゆけば。
一足づゝにさがり行く。
やがて軒ばや埋むらむ。
あすか越ゆべき立つ雲の。
今宵かもねんうづらなく。
いつしか里は見えわかぬ。

世のさがなさもしらぬがに。
問ひつ語りつ又笑ふ。
え耐えぬうさのつもれるに。
里のながめもさゝがにの。
うらみも深き白雪は。
立田の山の雪ふかみ。
はなれ小村の風寒し。

つれなき仇に從ふは。
嵐に狂けて我と身を。
春のはな衣まつ心。
夜半のなく田鶴ふる雪に。
をほつかなくにさ迷ふも。
よしもあしきも子のためぞ。
玉しくきはに驕りしも。
いつまでかくてつゞくべき。
平にあらぬさまにかへ。
身を顧みずなでしこの。

* * * * * * * * * *

嵐まつ間のさくら花。
棄てしもやがて立ちかへる。
みのしろごろもおほひ羽の。
いづれ浪華の江におほる。
飛ぶ鳥落す勢も。
平といへど其果の。
露のいのちと打とけて。

家のためにとはかりてし。　名も常盤木の其奇しき。
みさをは百世朽ちなくに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

こちの山またふもと川。　春はゆかしき花さきて。
香にこそいづれそのみさを。　秋は隈なく月すみて。
色にぞいづる其みさを。

常盤一首

吉村錦水

なでしこの露のいのちと打ちとけて
むすぶもあはれ夜半の下ひも

これやこれ夜半のなくたづふる雪に
みのしろごろもほひ羽にし

先きつ日親しき友なる筑水子より「ハザクラ」と題する子の詩集を寄せられ余に序を書かせんことを命ぜらる、余やもと譾劣蕪才敢て序と云はず、たゞ余が禿筆をかつて之れに應せんとするもの、滾々たる友情又辭するに由なきを以てなり。

蘭舟

我等の運命は微、われ等の幻は美也と古哲の云ひけむ實に理ならずや、見よ泡たてる海、沙ひろき陸、その大洋の碧波の中に、その丘壑の綠樹の中に囁ぎ渡る無韻の詩歌ありて、人はそこに幼きあまが子の歌を聞き、人はそこに勝ちほこりたる船出の唄を聞く。朝、太陽のしづかに東雲に光りを投げしとき詩に包まれし人の友はそこにありき。夕、星かげのほのかに天の戸を開きしとき、光に醉ひし可憐の

友はそこにありき。あゝ翼なき天の使そは世の友をして翼あるものとなしぬ、かくて人は翼によりて舞ひ、翼により て翔り、翼によりて燿る「思想」はやがてその一つの翼、他は「愛」と云ふもの、詩はその翼が翔らむとし、舞はむとし、躍らむとして無限の大氣をうつ囁きと云ふべからずや、詩はやがて人を包擁圍護せる素粧の花と云ふべからずや。あゝ友よ、人はかくの如にして詩に生れ詩に死するものなるを知らば、又何ぞ惆悵して其「惠」なるものを捨てんとはする

筑水子は余が最も尊び最も親しめる友にして同時に筑水子の詩は余の尤も愛誦し尤も賞歎する處なり。今や其の詩盛

粧して出づ、何ぞ祝はざらん乎試みに其詩集を繙かむか。詩情欝勃として隱的の間に現はれ、幽微暝怪として咫尺の間に磅礴し。あるものは、六花繽紛として春郊に亂るゝが如く、あるものは彩虹の模糊として天邊にかゝれるが如く、或ひは金波炫燿して水漿迸ばしり或ひは細雨霏々として銀箭亂る、而して其韻の清秀にして其調の高雋なる春花の美、秋月の妍も啻ならざるが如きものあり。蓋し子の性の優麗高尚なるに其の今日ある豈にあやしむ處ならむや

願ふ處は君によりて、理想の火山に爛火をうつし永く此の瀛内の地に詩運のつくるなからしめば、余も亦、花と共に野に眠らむか、あゝ人生百歳にして挽歌あり。詩ありて而

して始めて人に花あるを見ずや。

* * * * * * * *

天地唇甘うして
春の女神の頰柔し
自然美なるに人の子は
など詩の秘密認めざる

光り満ちたる天地を
うれたむ人の多くして
詩神の歌の絃の音に
のらぬことこそ怪しけれ。

されど筑紫の濱白く
船歌くしき磯の邊に
一日嵐のしきりきて
文星とんで海に入る。

その夕ぐれか生れたる
星をかざせる詩の光り
そのまなざしを君に見る
筑紫の海の濱にして。

なちの神山瀧こりて
白龍めぐる淵深し
筑紫の海に雨はれて
紅霓わたる空清し

その大なるはるかなる
自然の心神の韻
あやどる筆にうつされ
やがてぞ見ゆる君が歌
樂しいかなや今にして

若き詩人こゝに見る
いざ懊惱の夢去りて
世や永却にやすかれよ。

あゝ吾もいざ君によりて
くしき天地の胸の中
詩神のうでに抱かれて
あつき情けをくまんかな。

蘭舟

亞山の雪

（漢尼拔）

蘭舟

雲山崩れ日は落ちてこゝ、黑海の波凄く
喬松鬣をふるはして弦習々の風の聲
九天銀河の影のびて西バルカンの山淡く
紅蓼の里白蘋の浦萬里煙波の星の夕
翼たゆげに大鵬はこの岸の邊にやすらひぬ
惱の巷遁れでゝ前程遠くかけるとも
昨日の夢のおたけびはなど忘れめや長しへに、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

命の晨ちかいてし靈前の宣いかにとて
そむき果てめや慈父の恩今蕭牆に苦める
かの頑冥の敵國に正義の光醉はしめて
この常勝の劍をば七丘のもとにこけらせん。

かくて絶倫の英傑は今日青春の好齡に
精騎十萬エブローの流れを踰えて氣は高く
秋鞭今や萬瘴の憂き深かりし地をすぎて
のぼる亞山の雲の宿君蓋世の吼劍は
十二万丈雲深きサン、ベルナーの嶺高く

どよみの如き胡笳の音と劒のごとき山上の
獵々の風したがへて氷りつらなる幾峯を
たける馬蹄に打ちこえつ名もアルプスの峯の上
雲烟かすむイタリヤの無邊の活畫にらみつゝ
もゆる呼吸の一喘ぎ呑みぬ羅馬の半島は。

髮天風にけづられて芳名高き英雄の
あらびや如何に曙の希望の旗手くもの色
白波なびく疊々の山のあなたの國や今
猛虎一たびくだりなば仔羊の遺毛あるべしや。

雪乾坤をしばとめし亞山の險をこゝに經て
颼々のかぜ逐ひ行けばこゝぞ羅馬の一局地
將卒なかば失ひて痼疾のうれひたえずとも
情義あまねき戰刃にいでやぶらん殘虐を。

朝旗角に萬千の死をわすれたる狼軍も
智勇そなはる良師の戰塵たかくけたつれば
みだるゝ敵は麻のごとあるは刁斗のあさの陣
カンネー城の曉に腥風すごく万級の
尸のやま血のいづみ牛火の策を用ゐては

可久の計をくぢきつゝいま獨行のいきをひに
隆々のほまれいやたかくローマ孤城の壁の外
八荒ひびく梵歌のこゑ

十たび王師は出でつれどいかでか君の敵ならむ
燹火塵烟たえずして千郊の春花はなく
陣頭の意馬こゑあらし。

あはれ狼軍將つきて又矢さけびの聲なさや
强弩輪壁をだき込めて見よ鼎中の肉は皆な
つばさ音なくとび行きつかへすに易き落葉の

すがたは空し九五の位。

あはれ帷幄人たえてまた楯互ふ色なきや
軍師邊城をくぢきつゝきけや騏聲の風あらし
古聖のねむる七丘の魂はさめなんとう〳〵と
暗夜鼓角の遠ひゞき。

憑河のきほひ今更らにおごる昊天秋九月
歡會のゆめ永うして兜星ひかる夕まぐれ
きみ鄉關をさりてよりこゝに星霜廿旬
いま將たともにはらからと力協せて國敵の

さけぶ烟にうたはんと思ひしそれもあだなりき。

短檠うすく營房に昨日の夢をしらべつゝ
のぞみをたどる飛將軍眠りの神に守られて
いまこそ寄するまが事をなど知るらめや人の身の、
あゝ洛營の朝ぼらけ慕へるきみがはらからは
草葉のつゆとあへなくも一元の首こゝにいざ
いま永却のわかれとや。

念ひし國のはらからと訣れてこゝに惆悵の
恨もふかく湧くくもに又や王師をくだきつゝ

南關あらくたけりしも時の流れはいにしへの
暴虎のあらび返されて幽鬼群がる半島は
狼軍の聲陸梁のおもかげこゝに興りにき。

されど後林やすからで嵐に叫ぶおたけびは
我が英雄をもとめ來ぬあゝ如何にせむ衰龍は
肉薄敵にせめ入りて入日のかげを呑むべきに
釁蕭牆にひらきてはあたら十萬の血をぬりし
敵地の城を打ちすてゝいざ鄕關をふせぐべき
あはれ正義の旗たてゝ櫛風沐雨二十年
いさましかりし遠征の夢の俤いまこゝに

名殘や長く伊太利の雲山遠し暮の色。
旌旗かへりぬカーセーヂ君が擧世の勇烈は
西に機軸を轉じつゝ萬古の仇とこゝにまた
劍交へんツアマの野

大挪の風にさそはれて牙明の望慕ひつゝ
爭ひさけぶ狼軍と情理の光あふぎつゝ
ふるひ勇める君が軍あゝ天日は淡うして
義の閃きを見ざりしか三尺の劍空になき
風塵の腥ぐさく韜略あはや暴狼に
桂樹のほまれ奪はれぬ。

あゝ拔山の勇挫けきみ常勝の劍折れて
望み空しき秋のくれなどか叫ばん忠憤の
君は非運としりつゝも輪嬴を天に托せしに
國に仇なる頑佞のねたみの影に隔たれて
星花稀れなる黃昏になれこし國を友びとを
はなれて獨り立ち出づる偉人の思ひいかなりし。

聖都カルタゴ後に見てあつき涙と苦しみと
滿腔の血とおさへつゝ至るはいづこ荒野原
身は關山を隔つれど單劍國を忘られず
六軍の兵今なくてねたみの影はあらぶとも

君終天の敵國にせめて報ゐん桎梏を

拔山の勇おもむろに社稷ことなる廟堂を
憂ふる人となりつゝも一片孤忠の志
成竹胸にあふれでや三寸の舌帝にとき
茲に十全の計なりて二十餘年の忠憤の
あらしはいまか海のごとされど大空たゞ中に

浮びいさよふ朝のほし鴟獺の將礦世の
莫耶の光り知るべしや天運つひに傾きて
ふたゝび咲きし歐東のほまれの花はちりにけり

時刼のうしほにのせられて笑みかざしたる蟄龍は
なげきの淵になげられぬ。

貔貅十萬アルプスの滿山の雪ふるはしつ
精騎三千タイバーの流れに旗鼓をきゝしとき
正義を負へる進軍のその勇烈や如何なりし
あゝ松柏もしかずかに秋に傷めばうつろふを
耳順の齡ひはやすぎて機軸一たび擲てば
こゝも非情の秋の空。

誠忠國を計れども天その時をかさずして

かざしの花の色淡く今や消えなむ英雄の
義にあふれたる魂一つあはれ時勢の高潮に
雄圖も今や傾きつ廻る命と高き名と
もふて跡なき人生の夕の夢をはなれつゝし

運命よいれづ人力の抗しあたはぬ小車か
月日に空をめくれども驕れる子等も泣く子等も
共に社會にうかびつゝ時のながれにゆられては
すぎこし方は灰のごとほだしは同じ人の世の
さとりはいづれ幸なれや君よ悲命を天に謝せ
こゝカルタゴの犧牲としてこゝに此のよの花として

六十の春短くて胸にあふるゝ韜略を
入日の影にめぐらせど春の光の過ぎ行けば
琴秋風にかなたれてこゝも虎狼のあだはあり
出で來し國よいざさらば鄕廬の友よさらばいざ
この萬劫の英魂は國の命を抱きつゝ
身に瘴藥のわづらひを仰ぎてこゝに高眠の
幽冥夕の客となりき。

正義の劍の閃きを世に注ぎしも五十年
短かゝらんやアルプスの嶺踰えしより四十星
情義のほまれきみが身の惆悵の魂萬古の色

など永しへに消ゆべしや。

卅四年十一月

心琴 終

明治三十六年八月十五日印刷
明治三十六年八月十八日發行

定價貳拾五錢

著作權所有

編輯兼發行者 東京市神田區錦町一丁目十番地 大月隆

印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 青木弘

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍工場

發兌元 東京市神田區錦町一丁目十番地 文學同志會
(電話本局千〇九十三番)
大阪市江戸堀上通 文學同志會大阪支部
廣島市西横町 文學同志會中國支部

美妙

人生の氣力　定價二十錢　郵稅四錢

人生の初旅　定價廿五錢　郵稅四錢

人生の老旅　定價廿五錢　郵稅六錢

人生の悔悟　定價二十錢　郵稅四錢

人生の片影　定價二十錢　郵稅四錢

人生の目的　定價十錢　郵稅二錢

人生經濟學　定價廿五錢　郵稅四錢

人物の裏面　定價二十錢　郵稅四錢

吾人の生活　定價二十錢　郵稅四錢

山高水長　定價廿五錢　郵稅四錢

風月萬象　定價二十錢　郵稅四錢

斷巖絕壁　定價廿五錢　郵稅六錢

枕頭の山水　定價二十錢　郵稅四錢

松風吟月　定價二十錢　郵稅四錢

郊外散策　定價二十錢　郵稅四錢

悲哀の快觀　定價廿五錢　郵稅四錢

萬情萬眉　定價廿錢　郵稅四錢

近世社會主義評論　定價一圓郵稅十六錢
社會研究新論　定價一圓郵稅十六錢
最近國家社會主義　定價六十錢郵稅六錢
東洋社會黨　定價五十錢郵稅六錢
急務檄言　定價三十錢郵稅四錢
斬奸狀　定價廿五錢郵稅四錢
精神と力量　定價三十錢郵稅四錢
虛心談　定價廿五錢郵稅四錢
活學談　定價二十錢郵稅四錢
活精神　定價三十錢郵稅四錢

活禪錄　定價五十錢郵稅六錢
禪學斷片　定價廿五錢郵稅四錢
聖僧道元　定價二十錢郵稅四錢
日本佛教拾二傑傳論　定價三十錢郵稅四錢
馬琴妙文集　定價二十錢郵稅四錢
滑稽妙文集　定價三十錢郵稅六錢
戲曲妙文集　定價三十錢郵稅四錢
呑氣文集　定價廿五錢郵稅六錢
高等艶麗文集　定價廿五錢郵稅四錢
立身の事蹟　定價二十錢郵稅四錢

研學の順序　定價三十錢郵稅四錢
青年の將來　定價廿五錢郵稅四錢
作文指南　定價廿五錢郵稅四錢
山水記事論說文　定價廿錢郵稅六錢
社交記事論說文　定價廿錢郵稅六錢
高等記事論說文　定價廿錢郵稅六錢
偉人の膽力　定價廿五錢郵稅四錢
偉人の生長時代　定價廿二錢郵稅四錢
頓才の詩人　定價十錢郵稅二錢
閨秀の佳人　定價三十錢郵稅四錢

婦人實務錄　定價三十錢郵稅四錢
女子講本　定價三十錢郵稅四錢
活戀　定價三十錢郵稅六錢
戀と死　定價二十錢郵稅四錢
墳墓の地　定價廿五錢郵稅六錢
失策の半生涯　定價三十錢郵稅四錢
成功秘訣到着　定價三十錢郵稅四錢
處世四十八手昨非錄　定價十二錢郵稅二錢
天籟萬丈　定價二十錢郵稅四錢
小文學　定價廿五錢郵稅四錢

小氣焰　定價卅錢　郵稅四錢
小哲學　定價廿五錢　郵稅四錢
珍本 鴨長明海道記　定價十五錢　郵稅二錢
國史資料 回國雜記　定價二十錢　郵稅四錢
理想の大臣　近刊
禪學の奧義　定價五十錢　郵稅六錢
哲學要領　定價五十錢　郵稅六錢
加賀の千代　定價二十錢　郵稅四錢
成效者の苦學　定價二十錢　郵稅四錢
軍隊の側面　定價二十錢　郵稅四錢

理想の政黨　定價廿五錢　郵稅四錢
社會學と哲學　定價六十錢　郵稅十錢
吾家の憲法　定價廿五錢　郵稅四錢
人生の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
文學の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
高等家庭讀本　定價廿錢　郵稅四錢
戀愛の精神　定價卅錢　郵稅四錢
人情の後見　定價卅錢　郵稅四錢
無能の天下　定價廿五錢　郵稅六錢
社會學講義　定價五十錢　郵稅十錢

自然界の審美　定價廿五錢　郵稅四錢
婦人の情力　定價三十錢　郵稅六錢
戀愛の文豪　定價三十錢　郵稅六錢
弱者の臨終　定價三十錢　郵稅四錢
英雄の片影　定價二十錢　郵稅四錢
心識活談　定價三十錢　郵稅四錢
詩經新體詩選　定價十錢　郵稅二錢
改選新體詩　定價十錢　郵稅二錢
詩の神　定價二十錢　郵稅四錢
學生の苦心　定價二十錢　郵稅四錢

老子講義新釋　定價一二錢
心學養性篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學道體篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學人間篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學道義篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學迷悟篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學性理篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學明德篇　定價廿五錢　郵稅四錢
心學靈性篇　定價廿五錢　郵稅四錢
俳流の女神　定價二十錢　郵稅四錢

緒言　定價廿錢　郵稅四錢
高等秀才文集　定價廿二錢　郵稅六錢
奇僧の片影　定價廿五錢　郵稅四錢
高等才媛文集　定價三十錢　郵稅四錢
風采と審美學　定價三十錢　郵稅四錢
審美學要義　定價三十錢　郵稅四錢
高等美文斷片　定價廿錢　郵稅四錢
女子美文斷片　定價廿錢　郵稅四錢
心琴　定價廿錢　郵稅四錢

青山藏書